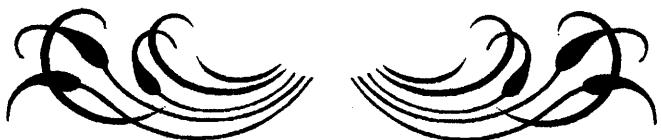


火散布沼周辺に
おける希少鳥類の
観察記録
クマゲラ
(Black Woodpecker)
Dryocopus martius

観察者：菅野 正己



火散布沼周辺域におけるクマゲラの生息状況について。

菅野 正己

はじめに

今回、当初主題として取り上げていた研究対象は、オジロワシの営巣および繁殖であったが、残念ながら浜中町内での営巣は確認出来ず5月中旬まですでに過去において何回か使用された営巣木の観察を続けたが、やはり今年度の繁殖は無いとの判断で急遽研究対象の変更を、キツツキ類 キツツキ科に属すクマゲラ (*Dryocopus martius*) に決定した。

調査場所：厚岸道有林内浜中町区域

調査対象種：クマゲラ (*Dryocopus martius*) (キツツキ類 キツツキ科) は、大きさがちょうどハシボソガラスくらいの大型のキツツキである。

ユーラシア大陸の中北部に広く生息しており、日本では東北地方から北海道にかけて分布・繁殖している。

しかし、個体数は少なく国の天然記念物に指定されている貴重なキツツキである。

調査方法：踏査と車を用いて、ライントランセクト法（ラインセンサス法）。

ライントランセクト法は調査地域内に1定のコースを設定し、コース上をゆっくりと歩行しながら、鳴声・食痕・ドラミング等情報を収集した。

営巣が確定してからは、ブラインドを使用しての観察を行った。

調査期間：平成9年4月初旬より平成9年7月中旬まで。

調査地周辺

の環境：面積 12,219.04ha の道有林に囲まれ、林相としては針葉樹と広葉樹のバランスも良く、野生鳥獣にとっても面積的に観ても理想的な生息環境であると思われる、実際に調査実行中、人為的な原因による不具合(クマゲラに対して) は全く無かった。

生息状況：国の天然記念物に指定されているように、希少種でもあるクマゲラであるが、私個人の見解ではあるが、この厚岸浜中地区においての個体数は、多いとは言えないまでも、他地域に比べると決して少なくはないと言えるのではないだろか。

火散布沼周辺において、同時期に確認できた繁殖個体は4つがい、厚岸地区を含めれば、さらに多くの繁殖個体がカウント出来るはずで、未繁殖個体を含めれば実に数十羽の生息があるはずである。

営巣木周辺

の環境：営巣木となる木には、特に種の決まりはなくさまざまであった。

営巣木の条件として、針・広葉樹どちらの場合でも地上から巣穴までの間に枝が無く、ヘビなどが容易に登ることが出来ぬようにある程度の太さを有する物であった。（胸高直径40cm以上）

また、巣穴の向きは南西から北西の間で、もっとも多かったのは真西に向いたものであった。

巣穴側の林相は、間伐してあったり、また、経営道であったりとある程度の伐開地であるのも条件の一つであった。

営巣木の種類：

木種	巣穴の向き	巣穴迄の高さ	胸高直径	樹高
トドマツ*	WNW	8m	0.6m	20m*
ダケカンバ	NNW	6m	0.5m	9m
カツラ	WNW	15m	0.6m	18m
カツラ	W	8m	0.7m	22m
トドマツ	S	6m	0.5m	15m
カツラ	W	9.5m	0.7m	22m
ハルニレ	WNW	9m	0.7m	18m
オニグルミ	W	15m	0.8m	20m
ミズナラ	NWN	7m	0.7m	17m

*印は今回観察した個体が使用したもの。

ペアリング：早い個体では2月の中旬には行動を起こすものもいるが、大抵は3月に入ってからがシーズンと言えよう。

通常、クマゲラは（他のキツツキ類も）繁殖期以外は単独で行動するので、毎年春になると新たなパートナーを求めて大変に目立つ行動をとる。その一つに挙げられるのが、ドラミングというキツツキ独特の行動である、キツツキ類の中でもひときわパワフルさを感じるものである、特にクマゲラのドラミングは半径1km以上に届き渡る事が出来る。ドラミングには、雌を引き寄せる意味わいもあるが、手段としては縄張の主張に多く利用されるのが一般的である。ペアリングのシーズンには、雌がこのドラミングの音に惹かれ、雄の近くに飛来するが、全てが楽にペアを組む事が出来るわけではない、過去に一度、一本の枯れ木に飛来してきた一羽の雌をめぐり、二羽の雄が同じ木で争っているのを見たことがあるが、争いの最中においても、雌が移動すれば雄も争いを続けながら雌の後を追うのである。この時は約10分程で決着が付き、追い払う事が出来た雄とペアを組むことが出来た。実際に雌は強い雄とのペアが簡単に出来た訳である、その後、鳴き交わしをしながら森の中へ雄の後を追って消えて行ったのである。

巣作り：3月下旬、自分たちの縄張が安全かなど見極めると、巣作りに入るのである。クマゲラは同じ巣を数年に渡り使用する習性があり基本的には、毎年新たに巣作りをする事はない。しかし、営巣木の老朽化が進んだり、また、営巣地周辺の環境が大きく変化した場合には新たに巣作りを始める。多くは、3月下旬からあちこちでドラミングとは違って静かな音が、聞こえてくる。営巣木となる木は広・針葉樹を問わず森の中のやや開けた場所に立つ、真っ直ぐに伸びた下枝の高い大木を選び、巣穴を掘りはじめるのである。

営巣木の胸高直径は、平均50cmを超えるものが殆どであった、これは、ヘビなど他の捕食動物からの危険を避ける意味でも重要な選択肢である。巣穴の高さにおいては、大体6m～12mぐらいが一般的で、今回調査した中で15mを超えるような巣穴も見つかつたが極めて希な方であると思われる。また、巣穴の向きであるが、大方、西を中心として西北西から真南の間であった、南東から北東方向を向いている巣は今回見つけられなかったが、気象条件などを

考慮すると、西寄りの巣穴は条件のひとつに入れて良いと思う。

巣作りは基本的に、雌雄の共同作業である。まず、入り口がある程度形づくまでは作業に打ち込む時間が短いが、肩まで入るぐらいに掘り進むと熱心さの度合いが増すというか、雄雌が絶えずどちらかが巣作りに専念しているのである。巣が完成するまでの工程は、掘りはじめてから、およそ一ヶ月である。また、お互いが巣の中に入って難なく作業が出来るようになると、巣作りの合間に数度の交尾をするのである。また、この頃になると、雄は巣内で夜を明かすようになる。これは、夜間における外敵の侵入を防ぐ意味もあり、特に、キツツキ類の巣はエゾモモンガ等に狙われやすく、抱卵時や孵化直後などに、襲われないように備えるのである。

産卵：産卵は5月上旬におこなわれる。産卵数は、条件にもよるが1～9卵で北海道においては3～5卵の間であると思う。エッグサイズは30～37×22～27mmで、孵化までの期間は14～16日の間である。また、今回の観察個体において、産卵数の確認は親鳥が繁殖を放棄する可能性が極めて高く、かつ、今回の観察に産卵数はさほど重要性がないので、敢えて親鳥に悪影響があると思われることは、後の観察においても極力控えた。

5月8日：午前4時22分；雌が巣に飛来する。すぐには入らず、巣の入りの周りを軽く突付く、雄は（雌の飛来と同時）に中から顔を出していたが巣外に出る、雌は一気に巣の奥まで入る。雄は近くの木に止まり、こつこつと樹表を突付いていたが、やがて採餌に出かけた。
4時50分；雄が戻る。10秒ほど上半身を巣内に入れていたが、中には入らず再び採餌に出かける、雌が出る様子は伺えなかった。
5時27分；雄が戻る。先程と同じような行動を取るが、今回は雌が巣の入口に顔を出し、周りを一瞥し巣外へ出る、入れ替わりに雄が中に入る。恐らく、産卵行動と見て間違いないであろう。クマゲラの産卵は、毎朝一個ずつ産み落すが、前日と前前日の朝の観察は出来なかつたので、産卵初日かは不明である。また、5月5日の時点では、雌が日中に巣に入る事はなかつたのである。

5月9日：午前4時08分；前日とほぼ同じ行動で雄と入れ替わる、雄もすぐには採餌に出かけず、しばらく巣の周辺にいて4時17分に採餌に

出かける。5時02分に戻り巣穴に止まると同時に雌が待っていたかのように顔を出し、雄と交代で採餌に出かける。5時40分雌が戻る、雄と交代する。この後、雌雄交代で採餌に出かけ、巣内に残った方は気配を消して、抱卵していると見て間違いないようである。採餌にかける時間は、ばらつきがあるものの、雄雌共に大体40～1時間40分の間で、2時間近く採餌を行っているのは一日の内で最も昼時というか、11時から2時頃までに多く見られ、早朝や午後の3時過ぎには1時間を超えて巣に戻ることはなかった。

5月10日：4時17分雄が巣外へ出る。この日は雄雌共に巣内にて一晩を明かしたようであった。朝、雌が飛来することもなく、雄は採餌に出かけるというのは、雌は巣内にて抱卵をしているのではないか？という疑問を持ったが5時02分に、雄が帰巣した時に雌が巣内から飛び出して立証された。産卵は5月5日ごろに始まり、5月の9日に最後の産卵を終えたものと見られる。

孵化：産卵から孵化まで要する日数は、12～14日ほどである。すべての卵が一斉に孵化するのではなく、1日1卵～2卵であろう。孵化予定日を計算すると、一番早い卵で、5月5日産卵だと考えて5月17日である。恐らく、5月の17～24日の間に次々と孵化するものと見られる。

5月17日：採餌行動も抱卵も普段と変わらず、前日同様に、特に大きな変化は見られなかった。18日も同様であった。

5月19日：この日は、行動に少し変化が見られる。5時17分雄が巣外へ出るが入口の脇にいて採餌には行かず、雌が巣内より出て採餌に出かける。雄は雌が出かけた後20秒ほどして巣内に戻る。この日は採餌から戻ると、雄も雌も少し交代に時間をかけていた。
最初の孵化があったのでは？。

5月25日：恐らく全ての卵は孵化しているはずではあるが、彼等の行動に目に見える変化はなく、ましては、雛の声などが聞こえるでもなく、巣内の様子が全く知り得ない状況は実に歯痒いものである。

5月29日：この日から、採餌から戻り巣内に入る時に、小さい声ではあるが、一声二声とまるで巣内の雛達にあいさつをするように鳴きながら巣内に入って行くのである。この時点では親鳥から給餌を受けているものと見られる。また、非常に弱々しいが雛の声も聞き取れるし、親鳥は両方とも採餌に出かけるようになり、夜間は雄だけが巣内に残り、明け方に雌が訪れるまで雛達の子守りをしている。

6月5日：雛が巣の入口にまで這い上がって、外を観察する仕草が頻繁に見られるようになる。雛達は好奇心旺盛である反面、とても警戒心が強く、外のちょっとした変化に敏感に反応する。また、この頃になると日中に親鳥が巣内に入ることは見られなくなる。

6月7日：9時07分雄が給餌に戻ると2羽の雛達が、巣の入口に這い出て給餌を受ける。餌をもらった雛達は一旦巣内へ入り見えなくなるが、またすぐに顔を出す、それが同じ雛か？給餌を受けていない雛が交代して出て来たのかは特定できず。給餌の時においては、複数の雛が顔を出すが、両親鳥が採餌に出ているとき雛達は、決して複数が顔を出す事はないので、この時点においても雛達の正確な数は不明である。入口に同時に顔を出して確認できた雛の最大数は3羽。

6月24日：幼鳥達もかなり大きくなって、巣穴の入口から体を乗り出して外を観察しているが、時折、カラスやトビなどが上空をかすめるとあわてて巣内に引っ込むなどの行動が見られる。

親鳥の帰巣回数が減ったように思える。一度、採餌に出かけて戻るまでの時間も、2時間を超えることがあり、また、帰巣しても巣の近くで鳴くだけで、給餌せずに再び採餌に出かける行動も見られ、2時間を超えての給餌の際には、幼鳥の声の音量など親と変わらないほどの声量を出す事もあった。

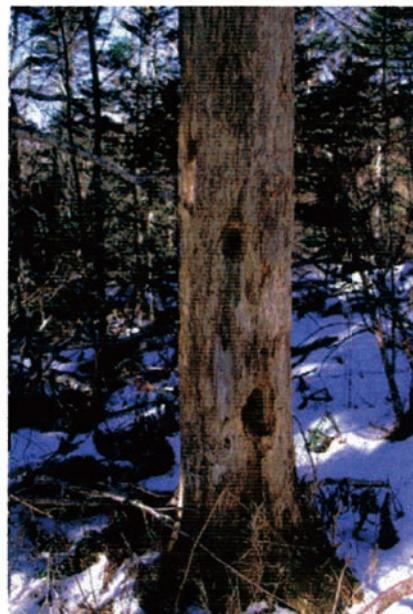
給餌に関して、雄雌で帰巣間隔に明らかに違いが見れた。雌は1～2時間なのに対して、雄は30分～1時間の間隔で帰巣していたが、給餌の回数は帰巣回数の半分も無かった。巣立ちの調整に入ったのか？幼鳥達は給餌量に満足しているように見えなかつた。



クマゲラの
食跡 No.1



クマゲラの
食跡 No.2



クマゲラの
食跡 No.3



クマゲラの
食跡 No.4



クマゲラの
食跡 No.5



食跡 No.6
モモンガの
ため糞



巣穴の計測。縦15cm、奥行30cm。



巣立ち後の巣を利用するモモンガ



巣穴の計測。横10cm、深さ40cm。



雛に帰巣を知らせる親鳥（雄）。



巣穴の計測。高さ6.4m。



餌をねだる雛。



雛に給餌する親鳥（雌）。



採餌中の雄。



外をうかがう雛。



外をうかがう雛。



オオタカの巣。



オオタカの巣。

写真（食痕）の補足

クマゲラの食跡：生木での採餌は、子育て期間中は極めて少なく、観察調査で確認出来たのは極めて少なく、写真 No.1, No.2 のように樹表から 10 cm 以上深く掘られた跡は見られなかった。

子育て期間中は、写真 No.3, 4, 5 のように立ち枯れした針・広葉樹がもっとも多く、これは餌の種類によって分けられているように思えるし、生木を写真 No.1, 2 のように 10 cm 以上も掘り上げての採餌は、枯れ木からの採餌と比べても決して時間・量ともに効率的とは思えないである。

生木における採餌行動が見られたのは、産卵初期までと、巣立ち 1 ヶ月後位からである。

写真 No.3, 4, 5 の食跡は新しい物ではないが、No.4, 5 に見られるクマゲラ以外のキツツキに因っての食跡痕がみられる。

No.6においては、採餌の為に空けられた穴にエゾモモンガがトイレとして利用しているものである。

考察とまとめ

厚岸道有林は面積12、219.04haを有し、厚岸町と浜中町の両町に二分しているが、野生動物に町界の認識はもちろん無く、今回の調査も限られた生息地での観察となつた。オジロワシも同じ道有林内で繁殖していくても、浜中の町界を超えていたために、今回はクマゲラに調査対象を変更した。

また、町内におけるオジロワシの繁殖も、1992年以前の資料が無く、いつから繁殖していたかは不明であるが、1992・93年には2羽づつの雛を巣立ちを確認している。

1993年以降繁殖が見れない理由は、1つに周辺の環境の激変によるものと、もうひとつは、繁殖個体の年齢的な問題、または、事故などによる死亡してしまったかである。

営巣木周辺の環境は、1996年の秋に植林事業の整地により、営巣木の西側部分が大掛かりに伐採されてしまったが、それが全ての原因とは思えず今後も観察が必要である。

この道有林は、霧多布湿原や厚岸湿原が隣接しており、厚岸湖や火散布沼、藻散布沼などの汽水湖を有し、標高も80mをこえることはなく、生息している野生動物の種類も知床に匹敵するほどである。また、この道有林内でヒグマも生息しているが、平地においての生息は道内でもここだけである。

鳥類においては、オジロワシ、オオタカ、ミサゴ、シマフクロウなどの希少種も確認している。ここに列記出来ない種もたくさんあり、また、生息が可能な場所もあるが、ここ数年、生態系を脅かす行為が目につくようになった。

抲伐は森を活性化させる意味でも重要であるが、作業時期や規模にも考慮が必要である。

今回、クマゲラの観察を取り上げて見て、かなり彼等の行動について興味をそられるものがあつたが、肝心の巣立ちの行程を見る事が出来なかつたのが非常に残念でならないし、報告書としても不完全なものである。

また、今回の観察で見られたことが通常のことなのか、比べる術がなく出来れば、来年度の繁殖行程で完全な報告書としたい。

参考資料

卵のサイズ・個数・孵化日数

Michael Walters著 “BIRDS’ EGGS” DORLING KINDERSLEY出版